その対象が主として行基や鑑真等の比較的史料を多く有している有名僧に限られていたのに対し、著者は、後世の伝記等の史料を援用することによって対象の枠を広げられ、それまで特に問題とされることのなかった僧にまで考察を加えられている。

後世の史料を援用する場合に最も慎重さを要求されるのは、言うまでもなく付加された説話的な部分と史実を反映した部分とを判別する作業である。一級史料が数少ない奈良時代の僧に関しては、その判別は困難を極め、それ故にどうしても推論の域を出ないのも余儀ないことと言える。しかし、そういった場合に於いても、著者は緻密な史料分析により事実の究明に努められている。このような著者の実証的研究の方針は、問題点に対する着眼と、背後の社会的情勢をも加味した研究の姿勢と共に、後学の我々が最も規範とすべきものであり、その意味において、著者の長年に及ぶ研究の成果が集約された本書が出版されたことは誠に意義深いことである。本書は、今後の古代仏教史研究の規範書として、また新たな研究の出発点として不可欠な一書と言うべきであろう。

（A5判　三〇三頁　一九八三年四月
吉川弘文館　五五〇〇円）
（本郷真紹　京都大学大学院生）

中村賢二郎
倉塚平編
『宗教改革と都市』

本書は表題をテーマとする研究会の五年にわたる共同研究の成果である。この「宗教改革と都市」というテーマ自体、「特殊専門的」と思われるかもしれない。しかし都市の民衆に担われた運動こそ、ほとんど唯一の宗教改革運動であるという見解を、この表題は示しているのである。

この間の事情を、本書は序説と第一章の研究史において明らかにしている。まず序説では、教会の情況、改革理念、諸身分の動向が述べられ、宗教改革時代のドイツを俯瞰した上で、「宗教改革は都市的事件であった」ことが示される。

第一章の中村賢二郎氏が執筆された「研究史」では、これを受けて引き続き研究史の関心が、思想史的研究を別とすれば、都市宗教改革史に移行した経過と、さらにその研究史におけるメラー説の意義、そしてシリング・スクリブナー・ブラディらを中心に最近の動向が紹介され、本書の主題である宗教改革の社会学的分析についての方向づけがされているのである。

さて第二章以下では南から順にドイツの六都市の改革運動が分析される。

まず森田安一氏によってコンスタンツのケースが扱われている。この都市では民主的体制（ツンフト支配）が成立していた結果、改革運動と民主化運動の結合が見られない点に特徴があり、改革は公開討論会を通じて実施された。この方式の持つ性格と機能が分析され、とりわけ世論形成という点でゲノッセンシャフト的性格の強い都市の改革運動に有効なパターンであったことが示されている。

第三章は前間良爾氏によるメミンゲンの考察である。ここではブリックレの説を受けて、宗教改革と農民戦争、都市と農村の関連に焦点があてられている。

まずこの都市はツンフト支配体制であるが、実質的に門閥が支配していたこと、施療院領を中心に都市領邦が形成されたが、そこでもゲノッセンシャフト的自治が展開していた点があげられる。そして各階層の

分析から中産のツンフト市民が改革の支持基盤であったこと、またロッツァーら説教者の思想とその農村部への展開から、農村部を含むゲマインデ運動としての宗教改革の性格が、その身分的地域的偏狭性という限界と共に示されている。

続く第四章では、フランクフルトについて小倉欣一氏が検討された。まずこの都市が政治、経済的には皇帝と密接な関係にあり、社会的には北ドイツ型門閥都市である点が指摘される。ここでも改革運動は市民委員会を作ったツンフト員が中心となった、ゲノッセンシャフト原理の回復をめざすものであること、さらに権力を掌握し続けた市参事会の政策へのその影響が明らかにされている。

第五章では永田諒一氏によりエルフルトが取り上げられている。この都市は領邦都市であるが帝国都市に準ずる地位を持ち、また門閥都市の範疇に入る。ここでは宗教改革が公式には導入されずに終った。この原因として宗教改革直前の社会変動が考察され、この変動期に「二流のホノラチオーレン」が政権に参加し、その結果彼らが改革の指導層の役割を果さなかったこと、都市領主等の外圧への対応が優先されたことが論証されている。

この「二流のホノラチオーレン」の役割については第六章の棟居洋氏が担当された門閥都市リューベックの場合から知ることができる。ここではレオンハルト兄弟団に代表される、上層であるにもかかわらず市政から排除されていた市民層、「二流のホノラチオーレン」が、改革運動の中核、推進役であったこと、彼らが政権に就くや指導層を失なって改革運動は衰退したことが明らかにされているのである。

これに次いで第七章では倉塚平氏がミュンスターを論考されている。この都市においてのみ、宗教改革運動が再洗礼派運動へと急進化したのであるが、その原因と支持層を、市の「二重統治」構造と神学指導者ロートマンの思想から検討された。「二重統治」構造とは、この都市独自のユニークなもので、市参事会と二流のホノラチオーレンの支配する全ギルド会議とが共同決定権を持つものである。一方、ロートマンの神学には、そのより強い神学的完全主義に再洗礼派への契機が認められる。宗教改革は、二流のホノラチオーレンが中心となって推進し政権の掌握に至るが、この時神学者がより純粋な改革を説き、市民層は二つに分裂、急進化することとなった。この間の経緯をシリング説等を批判的に援用しつつ明らかにされている。

最後に都市相互の関係という点から、市川依子氏が、宗教改革期の都市の共同政策をまとめられた。各都市毎に改革への対応を異にしながらも、帝国都市としての自由と伝統を守るという点で都市間に宗教改革への共同政策がとられ、さらにとりわけ皇帝との関係をめぐって政策が崩壊する過程を跡づけられた。

以上、簡単に紹介してきたように、本書は次のような視点、すなわち「都市市民が宗教改革運動の主たる担い手となった理由は、宗教改革の理念と市民固有の存在および意識形態の間の特殊な親和関係の中に求めなければならない。(三九ページ)」を持って、各都市の総合的把握を行ない、そこから一般化を試みたものである。

ただゲマインデ原理、ゲノッセンシャフト的性格の実態が、その存在形態が複雑であるために、明確に把えにくいという印象を持たれるかもしれない。しかし農村部を

含めたこの点の研究が今後の焦点とされていると思われる。また確かに、各論文毎にその対象および研究者の関心の多様さから普遍的なモデルの構築には至っていない。しかし既にそこからいくつかの運動の類型を推定することは可能と思われる。

比較都市研究の上でも、宗教と社会階層との関連においても、本書は多くの示唆を与えうるものと考えるので、各方面の方々に読んでいただきたいと思う。

（A5判　三四〇頁　一九八三年一一月　刀水書房　五八〇〇円）

（渡邊　伸　京都大学大学院生）

Norman Housley
The Italian Crusades

十字軍といえば、一般には聖地解放及び聖地国家の維持を目的としてなされた軍事行動を理解するのが普通であろう。しかし実際には聖地を対象とするもの以外に、種々の十字軍が存在した。即ち、聖地以外の地域（スペインや北東欧）の異教徒に対する十字軍、異端に対する十字軍（例えばアルビジョア十字軍）、教皇の政敵に対する十字軍等である。

こうした所謂「非聖地十字軍」については、従来、本来的な十字軍たる聖地十字軍からの「逸脱」・「乱用」として、ネガティヴに評価されがちであった。そして、その背景には、聖地十字軍の持っていた「宗教的動機」から「政治的世俗的動機」への移行、即ち十字軍の「政治化」「世俗化」という理解が存在していた。

このような理解の問題性については、既に紹介者は別稿（「非聖地十字軍」と十字軍の「政治化」」『月刊歴史教育』三号、一九七九年六月）で論じたことがあるのだが、その後本誌紹介欄で取り上げた Riley-Smith の二著（*What Were the Crusades?*『史林』六二巻六号、一九七九年一一月。*The Crusades*『史林』六五巻五号、一九八二年九月）も、そうした聖地限定論への反駁に力を注いでおり、「非聖地十字軍」の重視は近来の一つの傾向と言えるであろう。

本書の著者 Housley は、この Riley-Smith に師事し、「非聖地十字軍」の内、特に教皇の政敵に対する十字軍を取り上げる。表題の「イタリア十字軍」とは、「一二五四年と一三四三年の間のイタリアにおけるキリスト教世俗権力に対する十字軍」である。一般には「政治的十字軍」と呼ばれるものであるが、著者の立場はこれを採る所とはならず、まず序論冒頭において、「政治的」という名称の誤りであることを確認することから始める。

構成は序論と七章及び結論からなっており、序論においては、研究史を概観した後、この十字軍については、包括的研究が殆どなされて来なかったこと、にもかかわらずそれが教皇権と十字軍運動に対して与えた結果（実際には損傷）に関しては一般的理解が存在していることを指摘する。即ち、イタリア十字軍は同時代人の憤慨を巻き起こし、キリスト教世界の精神的リーダーとしての教皇の権威を低下させたこと、この十字軍のために課せられた税も教皇の権威を傷つけ、特にそれを通じて俗権の興隆をもたらしたこと、教皇によるイタリア十字軍重視は必然的に聖地十字軍の人的・物的涸渇を結果し、聖地国家の滅亡を早めたこと、更には、十字軍運動全体に対する幻滅、瞋宥の効力に対する疑念、キリスト教的良心の麻痺をもたらし、懐疑主義が生ずるに至ったというものである。

いわば中世後期の重要な諸相をここから